

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（学術）	氏名	片山俊宏
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論文題目			
<p style="text-align: center;">近代日本における「岡田式静坐法」の身体芸術論 —重力と癒し—</p>			
論文審査担当者			
主査	教授 青木 孝夫		
審査委員	教授 桑島 秀樹		
審査委員	教授 荒見 泰史		
<p>本論文は、明治・大正期に流行した身心療法「岡田式静坐法」を、一方で、美学・芸術学の視点から解明し、他方で、近代の社会不安を癒す身心療法である岡田式静坐法の特性を、日本的身体論として解明することを、目指したものである。</p> <p>本論文は序章及び結論を含む5章7段構成である。</p> <p>序章は、岡田式静坐法に類比的に適用するアルンハイムの「中心の力」について説明する。この議論は、視覚芸術を対象とするアルンハイムの「中心の力」の論を、人間の重力感覚の問題として把握し、これを静坐の身体における「中心の力」の考察へと適用しようとする方法序説である。</p> <p>第1章「静坐法の律動と中心運動」では、静坐法の特性を身体技法の観点から分析する。静坐法は反作用の原理を応用し、上半身の重みを床へ下降させ反動を生む。この反動のリズムを利用し、身体を中心部である臍下丹田から、下降・上昇の運動サイクルを循環さす点が、岡田式静坐法の特徴として分析される。</p> <p>第2章「万物の中心運動—天地の律動—」では、静坐法の知覚の変容について考察する。岡田式静坐法では、身体内に複雑に流れている血液や酸素が中心運動をなす。この中心の運動秩序は、天地空間の万物の動きにまで及び、自己と天地が宇宙の循環運動体となる過程として知覚体験の変容が解明される。</p> <p>第3章「静坐法の受容過程に関する考察—雑誌『静坐』をとおして」は、近代日本に於ける岡田式静坐法の受容の背景を、文献学的に検証・考察する。この静坐法の社会的受容の背景に、戦争・暴動・病等の近代の不安があったことを指摘する。</p> <p>第4章「身心療法としての浄化の表象—「激動」の時代のなかで」は、混沌・混乱に襲われている近代の文脈で、岡田式静坐法の中心運動が、混沌・混乱を弁証法的に統一・調和へと統合させ、時代への不安や情念を癒す効果をもたらすと了解されていたことを分析・指摘する。</p> <p>第5章「重力・下半身・内圧感覚の「発見」の表象—大地からの離脱のなかで」は、岡田式静坐法の流行は、大地と足との接触をめぐる伝統的な身体感覚が、近代的な科学技術（例えば移動に鉄道を利用すること）による大地からの離脱により、身体感覚に齟齬・変調が生じていたことにも由来すると指摘する。</p> <p>結論では、急激な近代化の過程で生じた不安を克服する岡田式静坐法は、大地との接触によっ</p>			

て身心の重力を回復し、不安や身心の分離を克服する独特の身心技法、身心の芸術として実践的にもまた社会的にも展開したことを指摘・解明している。

以上、岡田式静坐法を解明する本論は、1章・2章の前半部で、身体アートとしての静坐を解明する身体哲学的な議論と、近代日本の社会不安に対処する静坐療法の受容史的解明を果たす3章、4章と5章の後半部に区別される。前半部では、養生論をはじめ伝統的な身心訓練への顧慮が不足し、身心の哲学的考察はしばしば技法論的議論に留まり、また哲学的前半と後半3章の療法の社会史的分析への接続に齟齬がある等、本論の構成や議論にはなお改善されるべき問題が残る。

しかし、前半の議論で、身体美学をめぐる東西の比較論に洞察の視座を与え、未開拓であった「坐」を、日本の身体論の研究対象に位置づけた点で評価できる。後半部では、雑誌『静坐』をはじめ膨大な一次資料を渉猟・駆使し、岡田式静坐法を、歴史・社会学的な観点から近代の不安と関連づけて複眼的に分析した点は、独自の学的功績として意義がある。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。